

Title	書評リプライ：『コミュニティ・スタディーズ』の基底をなすもの： 西山志保氏の書評論文にたいする未完のリプライ
Sub Title	
Author	吉原, 直樹(Yoshihara, Naoki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2012
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.17 (2012. 7) ,p.134- 137
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次タイトル：「著者リプライ： 『コミュニティ・スタディーズ』の基底をなすもの」
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20120700-0134">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20120700-0134</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

書評リプライ：『コミュニティ・スタディーズ』の基底をなすもの

—西山志保氏の書評論文にたいする未完のリプライ—

吉原 直樹

---

西山志保氏の拙著『コミュニティ・スタディーズ』にたいする書評論文は、この種のものにまといがちな狭雑物をいっさい取り除いた、目鼻立ちのはっきりした論調を特徴としている。通常の起承転結の文章作法におさまらない拙著を行きつ戻りつつ縦横に読み込み、筆者である私でさえできないような基調音の抽出に成功しているように思われる。拙著が刊行されてからまもないある日のこと、刊行元の編集者を介して某新聞に拙著にたいする書評が掲載されることになっているという知らせがあった。しかし結局掲載されなかった。漏れ伝わってきたところによると、書評することになっている委員が、議論があまりにも「業界」サイドにかたよっていて、読者に紹介する意味がない、と判断したらしい。「業界」サイドにかたよっているという判断したい、いかにも論壇を揺曳している人にふさわしいものであるが、拙著が「業界」を強く意識した議論をおこなっていることはたしかである。ただ上述の判断は、拙著の表層にあるものをどう読み込むかは自由であるが、既存の「業界」の作法と文法を壊したいという拙著の基底にあるものを汲み取っていないようにみえる。その点、西山氏の書評は拙著の底意をうがっ、きわめて周到な読みのうえにあるといえる。だから、いまさら屋上屋を架す必要もないのだが、私なりに底意なるものを三点ほどに整理しておきたい。

一つは、拙著は「社会学」を出自としているが、そこでの議論はあくまでも「社会学」の「外」に向けられているということである。たとえば、「共同性」とか「公共性」といったタームが「都市社会学」とか「地域社会学」の内部でも頻繁に用いられるようになっているが、そうしたタームはそれじたいの用語法においても、具体的な適用範囲カバレッジの次元においても、驚くほどグローバルバージョン・スタディーズとか市民社会論の主潮とは絡み合うことがない。拙著はこうした状況を再帰的にとらえて、「内」となれあうのではなくて、むしろ「外」とわたりあえるような論理構成と視界設定をおこなった。その結果、既存の「業界」用語ではまったく登場しない「創発性」と「節合」が議論の基軸に座ることになったし、「非線型的思考」が拙著を通奏低音パッサ・コンディヌオすることになった。この点は、西山氏が達意に指摘している。ただ、意識しておこなった論理構成も視界設定も成熟からはほど遠いところにあり、議論全体にある種の生硬さをもたらすことになった。にもかかわらず、西山氏の読みは冴えわたり、多くの示唆を与えている。

さて次に指摘したいのは、拙著の視界がきわめて広域におよんでいることである。そこには、個別のディプリンレゾン・デュトルが守備範囲とするものを幅広く渉猟するとともに、それらを束ねて境界科学

吉原直樹「著者リプライ：『コミュニティ・スタディーズ』の基底をなすもの—西山志保氏の書評論文にたいする未完のリプライ—」

『三田社会学』第17号(2012年7月)134-137頁

としてのコミュニティ・スタディーズの領野に組み込むといった意図が込められている。ちなみに、拙著にコメントを寄せたある友人は、「コミュニティに関連する諸事象がまるでパノラマのように展開されている」と述べている。「パノラマ」とは言い得て妙であるが、それは諸事象を並列的に置いて立ちあらわれるものではなく、拙著における論理構成と視界設定が体系的におこなわれるなかで立ちあらわれるものである。つまり、個別ディシプリンからコミュニティ・スタディーズへの立ち上がりにおいて、ある種の論理の展開と視界の拡がりとともに立ちあらわれるのが、指摘されるような「パノラマ」であるといえよう。ともあれ、グローバル化の進展に伴って人びとのセーフティネット構築を不可避とするようなさまざまな問題群がコミュニティ・イシューとして取り込まれ、一つの円環の構造／独自性をもつコミュニティ・スタディーズに糾合されていくことになるのである。

最後に指摘したいのは、拙著がこんにちさまざまな形で社会に影響をおよぼしているコミュニティアリズムにたいして一つの明確なシグナルを送っているということである。これまでコミュニティアリズムについては、いわゆるコミュニティアンとリバタリアンという二項対立図式の下で前者にかかわらせて議論されることが多かった。しかし西山氏も示唆しているように、この二項対立図式はネオリベリズムがいわゆる「市民的互酬」の領域にまでウィングを上げ、またリベラル・ナショナリズムが政治的決定の最前線にまで顔を出すようになってともに以前ほど有効性を持ち得なくなっている。少なくともリアリティを持ち続けることがむずかしくなっている。しかしそうだからこそ、ネオリベリズムとネオコンサーバティズムが微妙に交錯する地平／境位（人によっては「不幸な結婚」というように表象しているが）をあきらかにし、そこから転相するコミュニティアリズムにたいする座を据える必要がある。拙著では、現代のコミュニティアリズムが「生きられる共同性」に立脚しているようにみえて、結局、その根元を掘り崩しているという見方に立っている。そしてその際、コミュニティ論が触媒役を果たしていると見ている。もっともその一方で、「生の複数性」に根ざすオータナティヴなコミュニティが「生きられる共同性」のより高次の段階での獲得を通して何とか展望できるまでになっている、とも考えている。いうまでもなく、これらの点についても、西山氏の指摘から学ぶところが多い。

ところで、西山氏はポスト3・11のコミュニティのありように言及しながら、筆者にたいして立ち位置の明確化をうながしているようにみえる。厳密に言えば、このことは拙著「以降」の課題ともいえないわけではないが、重い課題を背負わされたことにはちがいない。筆者自身、震災直後、福島市内の避難所、そしてそれ以降今日に至るまで津若松市内の仮設住宅をたずね歩いてきた／いる。研究者としてではなく、また似田貝香門氏がいうような「職能ボランティア」としてでもない、きわめて半端なよそ者として。それでも頼まれるままにいくつかの雑誌にペーパー<sup>1)</sup>を寄せた。それらにおいて共通の関心事となっているのは、「あるけど、ない」というコミュニティの実態である。地震勃発直後、あるいは原発爆発直後、多くの人びとの目

には町内会とか区会の姿がみえなかった。事実上、「あるけど、なかった」のである。

にもかかわらず、「農村コミュニティで守り継がれてきた共同体主義や相互扶助の伝統を回復させれば問題解決する」(西山)という言説がもっぱら「東京サイド」から、主にメディアを通して流された。そして、オーソドクスなコミュニタリアンの言説が広く日本全体を席捲することになった。つまりオールジャパンで受容されることになったのである。それらはコミュニティの実態から乖離してただけでなく、先の「あるけど、ない」という主張をかき消すのにも貢献した。だが、それだけにとどまらない。西山氏が指摘する、被災者の間に対立とか分断をもたらすディバイドを見えにくくさせ、ひいてはナオミ・クラインのいう「惨事便乗型資本主義」に潜むネオリベラリズムのイデオロギーの本質をカムフラージュするという役割を積極的に担っている。

もっとも、コミュニタリアン主導のコミュニティ言説が実態から乖離した願望とか期待をふくらませている一方で、それをとらえかえす動きが上から鼓吹された「絆」とか「むすびつき」に回収されるローカルではなく、むしろ地域を越えて広がる多種多様のネットワークを通して形成されるローカルのただなかから生まれつつあるように見える。ちなみに、福島について、「とどまっている人」と「移動した人」、「線量の高いところに住んでいる人」と「線量の低いところに住んでいる人」との「あいだ」が、地域を越えるいくつものネットワークに包み込まれることによって、「分断されたもの」から「近い」ものに変わりつつあるというケースがいくつもあらわれている。この「近い」ものを認識し合うことが、単なる空間的近接に還元されない「隣り合うこと」の再発見につながり、コミュニタリアンにからめとられることのないコミュニティをうみだすことになるのである。むしろそうした場合、「あるけど、ない」という状況のリアルな認識が起点／基点を構成することになる。同時に、上述のようなコミュニティがかりに拡がりを見せるようなことがあっても、常に上からのまなざしにさらされていることを踏まえておく必要がある<sup>2)</sup>。

さてここまではずみで書いてしまったが、ひょっとしたら西山氏の真摯な問いに何も応えていないのではないかという思いにとらわれる。しかし、もしそうだとしたら、まっとうな答を出すのはもう少し先にしたい、と思う。何よりも、いま訳知り顔で応えるのがなぜかためられるのだ。私は相変わらず、会津若松市内の仮設住宅にはほぼ隔週で出かけている。ちょうど 4 月上旬のこの時期、会津磐梯山のところどころに雪が残っていて、その間にみえる峻嶒な岩肌が美しい。仮設住宅に身を寄せている大熊町民にとって、厳しい会津の冬をくぐりぬけて手にする季節の到来である。かれら／かの女らにとって、燭光がようやくみえはじめた段階なのかもしれないが、仮設住宅からあおぎみる会津磐梯山の風景には格別のものがあるだろう。そうした思いをどこまで共有できるのかわからないが、最近、仮設住宅内で起きたちょっとしたことに、私自身、ゆれている。

私が出かけている仮設住宅でも最近自治会ができた。そして 3・11 前に大熊町のある地区で

町内会長をやっていた人が自治会長に選出された。何よりも行政と住民の狭間で悩むことが多くなった。ところが住民からは「行政より」といわれ、どうも評判がよくない。そんな彼が、あるとき一住民が無知のためにおかした誤りにたいして「責任は自分にある」と身をかけて守った。その人じたい、地震直後「隣近所を見ないでいち早く家族、親戚と連れだって車で逃げた」人びとの一人である。考えてみれば、私自身、地域コミュニティについて「あるけど、ない」といつてきたが、ひょっとしたら見えないところで「あった」のかもしれないし、あるいは「ない」ところから新たに「ある」状態が生まれてきているのかもしれない。さらにいうなら、上述の事態にギアーツのいう地域の「多元的集団構成<sup>3)</sup>」のようなものが微妙にからまっているのかもしれない。そういう思いにとらわれている。いずれにせよ、自己反省のようなものも含めてさまざまなことが脳裏をよぎり、いまは沈黙するしかないと考えている<sup>4)</sup>。

#### 註

- 1) 今から考えてみれば、臆面もなくよく書いたと思うが、それらのペーパー名を念のために記せば、以下の通りである（いずれも単独執筆）。  
 吉原直樹 2011 「災害・復興とコミュニティ」（『地方自治職員研修』622）  
 吉原直樹 2011 「ポスト3・11におけるコミュニティ再生の方向」（『地域開発』564）  
 吉原直樹 2011 「コミュニティ・ガバナンスとローカル・ノレッジ」（アジア太平洋資料センター『オルタ』2011年9・10月号）  
 吉原直樹 2012 「見直されるコミュニティ力と過剰期待への警戒」（『農業と経済』78-4）
- 2) なお、西山氏もハーベイの『新自由主義』から引例して、同様のことについて言及している（『都市政策の転換とガバナンスの展開』西山八重子編『分断社会と都市ガバナンス』日本経済評論社、2011年）。
- 3) この点については、Geertz, 1963, *Peddlers and Princes: Social Change and Economic Modernization in Two Indonesian Towns*, University of Chicago Press.を参照のこと。
- 4) ちなみに、『日本都市社会学会年報』の近刊号に、年報編集委員会のもとに於いて、渡戸一郎氏の拙著書評論文にたいするリプライ原稿を寄せた。社会学者が大挙して被災の現場にかけつけている状況にたいして、存在論的なく問い込みが必要なのではないか、と提起しておいた。

（よしはら なおき・大妻女子大学）